

旅日記・紀行文と地方社会  
(重近啓樹先生追悼記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯之上, 隆 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00007061">https://doi.org/10.14945/00007061</a>

# 旅日記・紀行文と地方社会

湯之上 隆

はじめに

いづくにもあれ、しばし旅立ちたるこそ、目さむる心地すれ——、よく知られた兼好の『徒然草』にみえる述懐だが、古代から近世にいたる旅日記や紀行文の作者の眼には、いったい、地方社会がどのように映ったのだろうか。

人は日常の暮らしの場を離れ、草枕と波枕を続ける時間と空間のなかに身をおいた時、旅立ちてこそその哀しみと淋しさ、時折の喜びと愉しみを味わいつつ、自分の来し方を顧み、さらに先の人生に思いをめぐらす。さまざまな理由や目的で出かけた旅の途中で、見聞した情景や人びとの暮らしなどに触発されて、いのちを営む時代の空気の影響をも享けながら、作者の人生観や美意識・自然観によって選り書き留められたものが道の記であった。江戸時代中期の国学者伴蒿蹊が、橘南谿の『西遊記』に寄せた序文に記したとおり、道の記をあらわすには、心剛にして身健という旅を続けるための条件のほか、旧記を知り、風流の精神をもち、加えて文筆の才をあわせもつことが必要であった。

中央と地方の概念やその成立過程、両者の関係については議論があるが<sup>①</sup>、本稿では天皇の居住する奈良や京都という、日本全体で政治・経済・文化において求心力をもった都以外の、鄙とか田舎とか意識された場を旅した人々の旅日記や紀行文を主な対象としている。

## 一 鄙の長路

紀行文をつづった古代・中世の人々のさまざまな旅は、歴史の刻みこまれた歌枕や名所に足跡をとどめ、遁世修行者として秀歌を残した西行ら先人を偲びつつ、長い時を超えて掛け合い、旅路の忘れたい印象を書き留めるという手続きを経ながら、古典の世界とみやびな都人としての自分の立場を確認するものであった。そして中古・中世の紀行文学は、旅の途中の景観や風俗などを仔細に観察して忠実に記録することを目指したのではなく、「定型化された旅とその感懐をくり返し書き綴ることによって、貴族文化を確認しつづける」という重要な意味をもっていた<sup>②</sup>。

もともと地名以外の歌語をも含んでいた歌枕が、平安時代になって歌に詠まれた名所を指すようになると、歌人にとって歌枕は関心をもつべき対象となり、その数二〇〇にも達して、旅に伴う文化になった<sup>③</sup>。名だたる歌枕は屏風や寝殿の障子に名所絵としても描かれ、さらに「歌人は行かずして名所を知る」とさえいわれるようになって、新たな文芸の世界が生まれた。『伊勢物語』第九段東下りに描かれた、三河国八橋の杜若、駿河国宇津山の葛と楓、武蔵国と下総国との境の隅田川での都鳥は著名な歌枕となつて、山部赤人の富士山や西行の小夜の中山などとともに、その地を通る歌人たちの旅の記に書き留められ、のちには「歌枕名寄」「勅撰名寄」などが編集された。『古今集』の旅の歌はすべて実詠であったのに対し、『新古今集』では大部分が題詠となり、四季や恋について旅が題材となつたから<sup>④</sup>、居ながらにして名所を詠むとも

に、一度は訪ねてみたいという憧れをいっそうかきたてるものとなった。実際にその地を訪れた人々にとって、日頃詠みなれた名所は「ふる里びとなどのあへらんこゝち」(本居宣長『菅笠日記』)を抱かせた。

三河国八橋で『海道記』の作者が、『伊勢物語』の杜若の故事を思い起して、沢のほとりの木に歌を詠み、駿河国宇津山では路傍の木に札を打ちつけて歌を記したように、歌枕では路傍の木や石に歌を書いたり、札を打ちつけることが広く行なわれた。また『東関紀行』には宇津山の峠に歌をたくさん書きつけた大きな古びた卒塔婆があり、そのうちの心をとめた歌の傍らに作者も歌を書いたことが記されている。絵巻物に描かれた路傍の卒塔婆は、行き倒れの旅人を葬ったものその他、旅寝の憂愁を歌に託して披瀝するものもあったことに注意する必要がある。歌人のこうした習わしは、『とはずがたり』『都のつと』『宗長手記』『東国紀行』などにも見え、また宿所の柱や障子などに和歌を書きつけることもみられ、芭蕉も下野国雲巖寺の仏頂和尚閑居のあとに、即興の一句を柱に書きつけている(『おくのほそ道』)。短冊などを枝に結びつける意匠は、江戸琳派の大成者、酒井抱一の「糸桜・萩図」などにも描かれている。

紀貫之の『土佐日記』は、芭蕉によって『東関紀行』『十六夜日記』とともに道の日記の代表とされたが(『笈の小文』)、土佐守の任終えて都に帰る間の舟旅の途中、沿岸や泊まりの風景が書き留められることはほとんどなかった。海に入る月を見ては在原業平の和歌を思い出し、海から出る月を見ては阿倍仲麻呂の故事を連想し、景色によせて歌が詠まれ、近づきつつある都への思いが綴られた。それでも時に、土佐や阿波の社会状況や人々の暮らしも記されている。たとえば、元日を迎えた土佐国大湊では、正月の祝いの芋がらや荒布や齒固めもなかったし、楫取の歌う舟歌には、民衆の生活と心情が織り込まれている。この時期、南海道で活発であった海賊の襲来を恐れ、海賊は夜には出没しないと聞いて、夜中に阿波の鳴門を渡ったことも、この時期の海上往来の困難さを示している。

菅原孝標の娘は『更級日記』に、父の上総介の任終えて、京に戻る途中、足柄山で出会った老若三人づれの遊女が、『新

『猿樂記』に描かれたようにからかささし、額髪で髪が長く、色白で、美しい声でめでたく歌い、十三歳の作者にも感銘を与えたことを記している。また遠江国に入って病にかかり、天竜川の川端に飯屋をつくって、吹きあがる寒い川風に耐え、浜名橋は下向の時には黒木が渡してあったのに、帰京の際には跡さえ見えず、舟で渡っている。これは橋の維持管理の困難さを示す貴重な叙述である。

住み慣れた都への望郷の念は、都から鄙へ旅寝を続け、鄙で暮らす人びとの間に共通して見られ、鄙は都の暮らしを思っておこさせる地であり、「鄙の長路」はかれらの実感であったろう。地方官として任に赴いた貴族たちの奈良の都を恋うる思いは、『万葉集』にも数多く収められており、かれらの都誇りには地方の蔑視がつきまとっていた。<sup>5)</sup>紀貫之は正月七日、土佐国大湊で白馬の節会を思っておこし(『土佐日記』)、鎌倉に着いた『東関紀行』の作者は「日ふるまゝにたゞ都のみぞ恋しき」思いを募らせた。

飛鳥井雅有は祖父雅経以来、関東祇候の廷臣として蹴鞠・和歌をもって朝廷と幕府に仕えたが、望郷の念はひとしお強く、山に雪の降ったのを見ては嵯峨の小倉山を思っておこし(『最上の河路』)、美濃国不破関を通るのも十度という稀にみる京・鎌倉の往來を繰り返しながらも、近江国番場宿の旅寝の夢でみるのは故郷の都で、尾張国萱津のあたりから「松の色も、都には似ずなりにたる」(『春の深山路』)と目に映ったのであり、どこまでも都人として鄙を見る目をもち続けたのである。

文祿元年(一五九二)、木下勝俊(長嘯子)は豊臣秀吉による朝鮮出兵に従軍するため、肥前国名護屋に向う途中、備後国神島で蹴鞠を珍しげに見る田舎の人々を目に留めている(『九州の道の記』)。

平安時代末期、地域の政治・経済の拠点、峠や大きな川をひかえた交通の要衝に成立した宿は、宿泊施設で働く人々を中心に、旅人や物資の輸送に従事するなどさまざまな職種の人々の生きる場であり、鎌倉時代には武士が経営に関わるこ

とも多かった。交通の発展にともない、宿がにぎわいをみせるようになる、周辺の農民や浪人を労働力として吸収する場にもなり、地域と地域とを結ぶ流通と交易と情報往来の場でもあった。高階宗成の撰といわれる『遺塵和歌集』には、弘安（一二七八〜八八）の頃、京都から東海道を東国に下る途中の六十の宿と名所などが詠みこまれた長歌が収められている。紀行文にも宿や市の模様が描かれているが、交通路の変遷や隣接した宿に繁栄を奪われるなどの理由によって、宿としての機能をしだいに失った所もある。『東関紀行』には、近江国篠原は以前旅人が泊まったが、今は通過することが多くなって家居もまばらになってしまったことや、尾張国萱津宿に市が開かれて大勢の人びとで賑わい、家への土産を手にも携えている光景が記されている。

旅の仕方や自然のとらえ方、その表現形式を型にはめられた都人たちの旅の記にも、旅の途中で時折関心をひいた地方社会の姿が書き留められている。熊野参詣の旅を記した増基の『いほぬし』には、熊野での法華八講や弥勒の救済を願って流行した埋納経の様子が描かれている。『海道記』の作者は、尾張国で桑が植えられて養蚕を営む女性と、鋤について農作業をする翁と、手習いをするこもなく足を泥だらけにして農業を習う禿の子供たちの姿を目にしている。また『海道記』の作者は駿河国の東海道の本道はずれて宇度浜を通っており、補陀落山久能寺の由来や地方での舞楽の展開を記して貴重である。飛鳥井雅有は美濃国墨俣で、高い堤が築かれた川より下に里があり、水量が増えた時は舟が堤の上を走るという里人の話を記している（『春の深山路』）。

高野山と伝法院との争いの際、高野山の道範は仁治三年（一二四二）七月讃岐に流されることになったが（『南海流浪記』）、讃岐守護が在京していなかったため、かわって淡路守護の四郎左衛門尉（長沼時宗）に預けられ、淡路守護所の使者が同行して讃岐守護所の長雄二郎左衛門のもとに送られた。この時の讃岐守護は三浦氏で、長雄（長尾）二郎左衛門はその代官として在国していた<sup>6</sup>。翌日、道範は守護所から御家人の橋藤左衛門高能に預けられており、鎌倉幕府における流

人の護衛や管理を示して注目される。

後深草院二条が参詣した伊豆国三島社では、奉幣の儀式は熊野参拝の作法と異ならず、また参詣者のなかに壺装束の女房が見られ（『とはずがたり』）、その風景は『一遍聖絵』に描かれた三島社境内を思い起させる。二条が鎌倉に下った正応二年（一二八九）九月は、將軍惟康親王が執権北条貞時により廃された時期で、親王が「いとあやしげなる張り輿」に乗せられ、罪人護送の作法に従って輿をさかさまに對の屋に寄せられた様を見聞している。

鎌倉幕府の歴史のなかで、最大の強権を掌握した北条貞時邸が將軍御所に比べてかなり豪華で、「御方とかや、出でたり。地は薄青に、紫の濃き薄き糸にて、紅葉を大きな木に織り浮かしたる唐織物の二衣に、白き裳を着たり。みめ、事柄誇りに、丈高く大きなり」と、唐織物を着た妻の覚海円成が威風ある体つき大きな女性であったことを記しており、史料の乏しい円成に関する貴重な記録である。二条は奈良の旅では中宮寺で長老信如の厚意によつてしばらく留まつており、律宗の尼寺が旅する女性の宿泊施設になっていたことを示している。阿仏尼が鎌倉で極楽寺の傍らに住んだのは、奈良法華寺に入つて西大寺律宗と深い関わりをもち、忍性と知己になる可能性があつたことによるとみられる。

二条は旅を続けながら、契りを結んだ「有明の月」や後深草院の追善のために長い時間をかけて五部大乘經（8）を書写し、奉納している。華嚴經・大集經・摩訶般若經（大品般若經・法華經・涅槃經）からなる五部大乘經の書写と供養は、十世紀後半に京都とその周辺の天台寺院から始まり、鎌倉時代には地方にも伝わつたが、二条が尾張國熱田社で華嚴經三十卷を供養した際には、導師が式次第や作法をよく心得ていないようであつた。

また備後国鞆の浦の大可島には遊女が庵をならべて住んでおり、二条は長者の尼から宿縁によつて迷いの世界から目覚めたという話を聞いて羨望の念さえ抱いている。遊女は、もともと宴席で歌や舞いによつて賓客の接待にあつた遊行女婦と呼ばれる準女官的性格をもつ女性たちが、十一世紀なかば以降、歌舞と売春を専門の職能とする集団をつくり、宿や

津など交通の要衝を主な活動の場とするようになった。<sup>⑨</sup> 自立性の強い遊女は長者と呼ばれる元締めに統率され、『とはずがたり』にも見えるように、長者の多くは女性であった。

遊女は今様を中心とする雑芸に巧みなばかりでなく、平重衡と和歌の贈答をしたことが『平家物語』に描かれた遠江国池田宿の侍従のように、和歌や連歌を詠むことも教養のひとつであった。『東関紀行』には「夜もすがら床の下に晴天を見る」という『和漢朗詠集』の詩句を口ずさむ遠江国橋本宿の遊女をみて、風雅の情の深さを讃えて詠んだ作者の和歌が収められている。また建治元年（一二七五）八月、飛鳥井雅有は鶴岡八幡宮の放生会に列席するため鎌倉に下る途中、橋本宿には連歌をする遊女がいて立ち去りがたく、日暮になってようやく出発したことを『みやこぢのわかれ』に記している。

## 二 京へ田舎へ

南北朝内乱期には、出陣などを契機とする旅の記が生まれた。今川了俊が応安四年（一三七二）、九州探題となって赴任する際の旅の記『道ゆきぶり』は武将の著したものととして注目されるが、備後国太田荘の倉敷地として、また瀬戸内海の湊としても栄えた尾道の風景を、岩山の麓に家々が立ち並び、湊には陸奥や筑紫路の船も停泊し、その中を遊女を乗せた小舟が行き交っていると描写した。また長門国一宮忌宮神社の御齋祭の神事の禁忌を聞き記している。

中世後期には各地の大名や土豪の招きをうけ、知の遊びをくりひろげる社交の場としての連歌会を指導しながら、京と田舎との間を往来して旅を続ける連歌師の姿が多く見られ、旅の記をのこした。連歌は戦国時代の武士たちの同志的結合を強め、戦勝祈願などの目的をもち、たんに文芸趣味や権威づけにとどまらず、時代を生きぬく手段のひとつであった。<sup>⑩</sup>

出自は不明ながら、最高の連歌師としての榮譽をかちえた宗祇は、弟子の宗長の表現を借りれば、「京城のほまれありて、



公武のもてあそび人」(『宇津山記』)となり、貴顕や大名らの招待をうけて諸国遊歴の旅を続けた。周防・長門から北九州まで勢力をひろげた大内氏は、文芸にも深い関心を示し、教弘が連歌師正広を招請、さらに政弘は宗祇を招いた。宗祇は文明十二年(一四八〇)、周防国山口を出発し、大内氏の庇護をうけて筑前国太宰府天満宮・博多などを回り、山口に戻る三十六日間にわたる旅を『筑紫道記』として著した。この紀行文には、大内氏の北九州支配の機構、それを支える守護代・郡代などの動きやかれらの学問・文芸との関わりが記されている<sup>①</sup>。

十五世紀の後半からおよそ一世紀にわたった戦国の動乱の時期、自らの領国を国家と意識して支配の確立を旨とせず戦国大名にとって、各地域の土豪たちを抑えて交通体系と流通経済を掌握することは、何としても実現しなければならぬ重要な課題であった。筑前国刈萱関で、宗祇は通過するのを怪しげに監視する関守を目にとめていたが、「大内氏掟書」には赤間関等の渡し賃が細かく規定されており、また刈萱関でも関銭が徴収されていた。この頃、関所を統轄する権限は幕府にかわって諸国の守護が掌握するようになり、続いて維持管理の実務は土豪など地域の支配者によって担われるようになっていた。

旅の記をのこした連歌師として注目すべきは宗長である。宗長は今川義忠に仕え、宗祇の弟子となり、一休に参禅して諸国を遍歴したのち、永正三年(一五〇六)、今川氏の重臣斎藤安元の援助により、五、六十軒の家が立ち並ぶ東海道丸子宿から北に入った泉谷に柴屋軒を結んだ。宗長は連歌師として数多の連歌を詠み続けることによって、後に仕えた今川氏親の戦勝と安泰を祈願し、さらに甲斐の武田氏との講和を実現させるなど、外交使節としての役割をもはたした。また宗祇亡きあと、宗碩とともに連歌界の指導者として自ら東海道を上り下りする旅を続けた。宗長は遠江国懸川城の朝比奈泰能を訪れ、普請最中の城について、外城の周囲六、七百間で、堀や土居など堅固な城の構造を記し(『宗長手記』)、また駿府の町並みを、商人が「な候、いも候、なすび候、しろうり候」と、野菜などの名をあげながら売り歩く様を長歌に詠ん

だ。

戦国時代には戦乱の影響をうけて窮乏した多くの公家が地方の大名や土豪を頼って都を離れ、地域別の数は畿内を除けば北陸道がもつとも多く、東海道・中山道がそれに続いた。<sup>12)</sup>この時期の駿府は今川氏の城下町・宿場町として繁栄をみせ、中御門氏や宗長を通じて今川氏親と交流のあった三条西実隆は、享祿三年（一五三〇）の駿府の火災で二〇〇〇軒余りが焼失したとの報せを日記『実隆公記』に記している。

氏親から氏真にいたる時期に、史料に見えるだけでも三十名近くの公家や文人が駿河を訪れている。<sup>13)</sup>混乱の極みにあって戦乱の続く関東と境を接する駿河の守護をつとめる今川氏は、將軍足利氏の一族として誇り高い自覚をもち続けた。冷泉派の武家歌人として知られた貞世（了俊）以来、長い時間をかけて培われてきた今川氏の文化を育む姿勢は、義忠・氏親の代に築かれた姻戚関係による公家や文人らの往来を通じて、花開く機会を与えられた。公家らの直接の往来の他、僧侶や商人が使者となって京都から書状や、『伊勢物語』『源氏物語』『古今和歌集』を始めとする文物が東海道を下って駿河にもたらされ、一方駿河・遠江からは、黄金や浜名納豆・富士海苔・紬・茶などが進物として京都に届けられ、財政難に苦しむ公家らの暮らしを助けることになった。

山科言継が駿府に住む継母（中御門宣胤の娘で、今川氏親の妻寿桂尼の妹）の見舞いを主な目的にして弘治二年（一五五六）、東海道を下った時の旅の日記が『言継卿記』に収められている。天竜川の舟渡しでは言継一行の舟賃をめぐって喧嘩がおこったため、当時の慣行「中人制」にしたがって「所の長」二人が仲裁にあたって、事無きをえた。喧嘩の原因はよくわからないが、これ以前に伊勢国楠から舟で伊勢湾を三河へ向け志々島（篠島か）まで、十一里の舟賃は一〇〇疋のところを五十疋ですましたことに味をしめたことによるのかもしれない。

言継は駿府に下る途中、歌枕の小夜の中山と宇津山で和歌を詠んでいるものの、風景や人々の暮らしにはほとんど関

心がなかつたようで、日記にも書き留めることはなく、駿府での記録も時に仏事への参加はみられるが、多くは酒食と贈答の叙述に満ちている。言継も招かれた寿桂尼邸での宴では下戸の義元もたいそう機嫌よく十余杯を重ねており、義元の姿を知ることができて興味深い。言継が駿府に滞在して、接客と訪問に忙しかった半年ほどの間に、贈答のためとりかわされた品として、ミカン・イルカ・干ふぐ・遠江浜納豆・伊豆鮑・伊豆江川酒・富士海苔・木綿・沖津鯛・茜根紬などがあり、これらの品は当時遠江・駿河・伊豆の特産として知られ、商品として流通していたのであろう。

言継は駿府に滞在してふた月ほどたった十一月末、京に戻るための準備として、伝馬の通行手形の発給を今川氏重臣の飯尾長門守に依頼した。斯波氏から遠江を奪回して、駿河から支配領域をひろげた今川氏の場合、義元の時代、天文二十年（一五五二）前後の三河平定と尾張侵攻の過程で伝馬制を制定したと考えられている。<sup>14</sup>今川氏の伝馬手形の申請・審議・発給の手続きはよくわかっているが、「伝馬之印」をもって駿府を発った言継の記録は、それらについて考える材料を与えている。翌年伊勢へ出向いた言継は、この時、伊勢で国司北畠氏によって禁酒令が実施されていたことを書き留めている。<sup>15</sup>

文禄三年（一五九四）、近衛信尹は勅勘を蒙って薩摩へ流される途中、薩摩半島南端の山川湊で唐船やルソンに渡る舟を見物し、琉球人が須弥山（三味線）を弾き歌う酒宴を「興一入」と悦んでおり（『三藐院記』）、当時の国際交流を知りえて注目される。

天文二十二年三月、戦乱の続く東海道を関東に向けて急ぐ人々の姿がみられた。一行は備前国の法華宗の実成院日典ら僧侶五名と在家門徒二十人前後の一団で、目ざす先は、相模国比企谷妙本寺・武蔵国池上本門寺と甲斐国身延山久遠寺であった。<sup>16</sup>東国の日蓮ゆかりの聖地への巡拝は、日蓮入滅直後から始まり、しだいに僧侶や門徒たちの間に広まった。永正四年（一五〇七）五月、備前守護の松田元能は身延参詣の途中、駿河国海長寺に立ち寄っており、身延参詣が盛んに行わ

れたことを示している。

一行に加わっていた大村氏の残した「参詣道中日記」は、これまで実態がほとんどわからなかった法華門徒の巡拝の実態を明らかにしている。一行は野々口村を出発して堺までは船を使い、入京したのち東海道を東に向かった。足利義教も富士山を望んで和歌を詠んだ遠江潮見坂を下り、遠州灘に近い白須賀宿の主人は伊藤太郎左衛門といい、帰りもここに泊まった。藤枝でも駿府でも往復ともに同じ宿に泊まっており、東国の聖地巡拝を行う法華門徒たちには、出身の地域や宗派などごとに定宿があったと思われる。伊豆国三島を出発するところから、旅程の表記が坂東道の一里六町にかわっている。この日、一行は三島から南へ向かい、北条で関所を通り、日もささない石敷きの山道を七里歩いて、日蓮が配流されて三年を過ごした伊東に着き、さらに網代まで出て、船で小田原へ渡った。

そののち妙本寺・本門寺を巡拝し、さらに最後の目的の身延参詣を終えたのち、一行は今川氏の家臣伊東元実が城代をつとめる三河国吉田の城下で、思いがけないことに往路にはなかった関所で所持品を改められ、貴重品をとられたものの、あれこれ釈明して何とかとりもどしている。戦国時代には軍事的理由によって関所が設けられることが多く、一条兼良は『藤河の記』で奈良を出発して木津川を渡ったあたりから、戦乱に事よせて多くの新関がたてられて旅行の妨げになると記している。この先、法華門徒たちは三河と尾張の国境が緊張状態に入ったため、陸路を変更して海路で船酔いしながら、伊賀へ向った。この時期は、西三河から尾張へ勢力を拡大しようとする今川義元に対して、三河国人のなかにはそれに敵対する動きも目立ち、また尾張の織田信長も反今川の活動を画策していた。故郷備前への帰りを急ぐ法華門徒の旅程を急遽変えさせたのは、軍事情勢のあわただしい変化によるものであった。ちょうど同じ頃、法華門徒たちとは逆に京都から駿府を目ざしていた山科言継の継母が伊勢から海路で駿河に直行したのも、同じ理由によって尾張・三河での危険を避けたのであろう。

一宗一派の開祖である祖師や多くの宗教者たちは、旅のなかで信仰をみつめ深化させていったが、旅の記を書き留めることはほとんどなかった。その中で、禅僧の万里集九は詩文集『梅花無尽蔵』を著し、太田道灌の招きをうけて江戸に下る途中、尾張国清洲城の織田敏信第で犬追物を見、遠江国懸塚から錢五貫文を出して借りた舟に乗って駿河国小河に着いており、海上交易で賑わう小河の状況を記した。また海上交易でにぎわいをみせる武蔵国品河や、上杉定正と同顕定との戦乱の模様を書き留めた。

ちょうど同じ頃、北陸から関東・東北・東海へのおよそ一年にわたる廻国修行の旅を続けた聖護院門跡道興は、『廻国雜記』を著したが、白山禅定を行なうにあたって、当時の中心であった越前馬場の平泉寺に立ち寄らず、加賀から登拝しており、この地域に深まりつつあった白山末寺と真宗門徒の間の対立意識を考慮したもの<sup>16</sup>とみられている。廻国の目的は、太田道灌暗殺後の東国情勢の探知を幕府から依頼されたためとする説が出されている<sup>18</sup>。

上野国長楽寺の住持賢甫義哲が記した『長楽寺永禄日記』は、戦国時代の地方寺院の実態や経営の状況を示して誠に興味深い。長楽寺と深い関わりをもつ新田金山城主由良成繁の動向など、この地域の軍事情勢の他、寺領の田植えや馬による代かき、茶摘・製茶など折々の農事作業や、回国修行を続けて長楽寺に宿泊する六十六部聖の姿も書き留められている。

### 三 東往西遊

徳川家康は織田信長・豊臣秀吉の交通政策を継承して、道路整備・並木植立・関所撤廃などを推進し、慶長六年（一六〇二）には東海道伝馬制を実施した。これ以後、交通環境は改善され、諸国を廻る旅の条件はしだいに整い、名所案内記や入湯記の流行によって人々はますます旅へ誘われるようになった。

近世前期を代表する紀行作家は、しばしば指摘されているように、福岡藩の儒学者貝原益軒であろう。益軒は『東路記』の後記に、名所や著名な寺社、古戦場などについて、土地の人々から情報を入手し、「俗語を以て、只事実をのみあらはし侍る」と記しており、太平の世にめぐりあわせて、天下の名区佳境を見るところ、得がたい愉しみを与えられたことに感謝している。益軒は旅を読書とともに最高の愉しみとし、資料調査と実地調査を学問の基礎とした。益軒は『壬申紀行』に、険しい山を越え、深い川を渡り、危ない橋をこえるなどの辛い経験も時が過ぎればさほどのことでもなく、珍しい所を多く見れば、のちの思い出にもなると記しており、旅を愉しむ精神をもちあわせていた。

益軒は、「あまた所、たやすく見つる事、うれしくもそらおそろしくも覚え侍れば、我ひとり見かくしせんもつみふかくおもひて、世の人にも知らせんため」(『南遊紀事』)と、旅での見聞や経験を読者に伝えるために紀行を書き、さらに江戸時代初期・中期の旅行事情、生活や風習などに関する豊かな情報を後世に伝えたのであった。<sup>(19)</sup>

益軒の学問の方法は、博学が基礎になっており、それは各地を歩いてまで見聞をひろめて事実を確認し、経験にてらして知の真偽を吟味する志向によって支えられていた。<sup>(20)</sup>益軒独自の儒学の特質は、「『物』の世界を排除せず、天地、人、物の三者の連続的な関わり合いを問い、そのつながりのなかで人のあり方を考える」ところにあり、『和俗童子訓』の出版に見られるように、「益軒は社会の学習への需要を察知して、出版という文字メディアを活用した最初の知識人」であった。<sup>(21)</sup>益軒の教育論は『和俗童子訓』で、実践的にわかりやすく述べられており、これは調査と観察とに支えられた紀行文にも共通する特色である。

益軒と同じ頃に生きた芭蕉は、さまざまな艱難を経験しながら、自然を見、歌枕・旧跡を訪ね、俳諧の道を極める旅を続けた。「旅、東海道の一筋もしらぬ人、風雅に覚束なし」(服部士芳『三冊子』)と語ったという芭蕉の旅の記は、おくのほそ道の旅に随行した曾良の旅日記が示しているように、見聞を忠実に書き留めたものではなく、道行きの感懐を彫琢の

文と俳諧によって構成された芸術作品であることに注意を払う必要がある。『おくのほそ道』と中世の紀行文との関係については多くの議論があり、鎌倉時代では『東関紀行』が多様な内容の配合の仕方において、また南北朝時代以後ではわずかに『都のつと』と『筑紫道記』が影響を与えたにとどまるという指摘<sup>(22)</sup>に対して、『おくのほそ道』についてはこの意見を認めながら、連歌師の文章は俳文や狂歌咄の源流であったとする見解もある<sup>(23)</sup>。

板坂耀子氏は、芭蕉紀行の魅力について、「旅が娯楽化してゆく時代に、それ以前の古い紀行が基調にしていた、『都をはなれて地方にいく恐怖と悲しみ』『日常を捨てて非日常の毎日を過ごす不安と緊張』を、そのまま受け継ぎ、再現してみせたことにある」と説き、「おくのほそ道」に漂う孤独や悲壮感といった基調は、それ以前の古典的な紀行の伝統であり、意識して守られている分、いっそう純化されている」と評価している<sup>(24)</sup>。

近世の紀行文家の多くは地方の出身者であり、古代・中世の紀行文に見られた地方への違和感や蔑視はなく、地方社会の実態や自然などを細かく正確に読者に伝えようとした<sup>(25)</sup>。また中央に対する地方の評価と容認は、辺境への理解を生み、それぞれの文化の価値は相対化され、多様な視点が生まれたことは一般的に認められる<sup>(26)</sup>が、このことをすべての紀行においてはめることには慎重でなければならない。たとえば幕臣の遠山景晋は『未曾有記』で、陸奥国黒沢尻あたりから女性が眉毛を剃らず、風呂敷を頭に巻くなど、風俗が変わったことを記している。また初めて出会った蝦夷人の風俗等について、『蝦夷志』『東遊記』『三国通覧』等との異同を論じている。女性が眉を剃らず、お歯黒をしないなど、奥羽地方を旅する人びとの目に異様と映った習俗や、絵暦、理解しにくい言語などは、多くの紀行文に記されたが、それらの由来や意味・役割が考慮されることなく、その評価は古川古松軒の『東遊雜記』に代表されるように、自らの環境とは異なった習俗を夷風ととらえ、低劣・卑賤と評価するものであった<sup>(27)</sup>。

これに対して菅江真澄は、国学者・本草学者としての立場から、奥羽社会に強く影響を与えているアイヌ文化、古代・

中世の「蝦夷征伐伝説」や鳥追など農村の習俗を観察して書き留め、必ずしも野蠻と評価せず、文化を相対化する視点をもち続けた。<sup>(28)</sup>古松軒はアイヌ文化の固有性を尊重しながらも、他方で上方を絶対の基準にして、地方の文化や生活を評価するという二面性をもっており、真澄は同じ地域の農民の営みを地についた目でとらえ、古松軒のもつ問題点を鋭く指摘した。<sup>(29)</sup>また真澄や、越後と信濃の国境を旅した鈴木牧之は、現在よりもっと豊かな自然のなかで生きた野性のサル<sup>(30)</sup>の生態を、興味をもって観察し、鋭い感性によって淡々と記録している。

芭蕉や益軒とともに、多くの人に読まれ、批評されたのは橘南谿の『東西遊記』で、医学の修行を主な目的にして各地を旅した南谿は、天明二年（一七八二）の九州の飢饉の惨状や（『西遊記』）、翌年の東北の飢饉（『東遊記』）を冷徹な眼で描いている。南谿は『西遊記』に、九州には地神経を誦する琵琶法師が多く、とりわけ薩摩・大隅では平家琵琶より小さい薩摩琵琶を弾ずることが武士のたしなみとされていたことを記している。また音楽の研究者でもあった南谿は、大隅国台明寺でひそかに青葉の笛竹を入手し、文書四、五十通のうち青葉の笛竹に関する六、七通を写した。薩摩に往来する琉球人が琉球三味線（三線）をひきながらうたう琉球の歌を書き留め、薩摩国ノシロコ（苗代川）に住む朝鮮人陶工の風習や薩摩焼について詳しく記した。古川古松軒も『西遊雑記』に苗代川の人々が朝鮮風の習俗を強制されている様を描写している。南谿が九州の方言について、長崎の「ありばつてん」、薩摩の「がる」（叱る）などを書き留めたことも貴重である。幕臣吉田桃樹が著した『槃游余録』には、西伊豆三津での鮪漁の模様や、ルソンに漂着し五年を経て帰還した下田出身の清次郎の体験談が記されていて興味深い。日向泉光院の野田成亮が六年あまりにわたる廻国の記録として書き留めた『日本九峰修行日記』によると、地方の人々は廻国修行を続ける行者に対して、病癒の加持祈禱や珍しい話題提供などを期待しており、また幕末の六十六部聖には破戒の墮落した者が多かったといい、廻国行者の実態や、民衆との関わりを示している。<sup>(31)</sup>



## おわりに

十八世紀後半、寛政（一七八九～一八〇一）以後の紀行文には、旅先の土地を古典の舞台としてだけでなく、人びとの暮らしに関心を示すという姿勢がほぼ共通してみられた。司馬江漢『江漢西遊日記』、大田南畝『改元紀行』、川路聖謨『下田日記』などにみられる、古典の世界からいったん離れて旅を愉しみ、現実を自らの目で確かめて評価を下し、新しい事態に的確に適応できる旅の仕方は確かに新しい時代の到来が間近いことを示すものであった。

三峰型に定型化されて描かれることの多かった富士山は、十八世紀中葉以降、実景に即して多様な姿で表現されるようになった。<sup>(32)</sup> また、江戸時代後期には、西洋から伝わった遠近法の影響をうけて、高い所からの眺めを描く眺望図が生まれた。紀行文や絵画に見られたこうした変化は、自然と社会を直視して、従来の尺度にとらわれずに、作者の才能と個性によって自在の表現を試みるという共通した現象とみることができよう。<sup>(33)</sup>

(1) 木村礎「日本歴史における『地方』と『中央』——地域論に寄せて——」（『駿台史学』四二、一九七七年）、のち『地方史を考える』（木村礎著作集Ⅳ、名著出版、一九九七年）に収録。塚本学「日本史における中央と地方」（『千葉史学』三、一九八三年）、のち『近世再考 地方の視点から』（日本エディタースクール出版部、一九八六年）に収録。

(2) 大隅和雄「歴史資料としての紀行文文学」（『国文学 解釈と鑑賞』五四—一二、一九八九年）、のち『中世歴史と文学のあいだ』（吉川弘文館、一九九三年）に収録。大隅和雄「紀行文と中世の文化」（『新日本古典文学大系 中世日記紀行集』月報20、岩波書店、一九九〇年）、のち『中世歴史と文学のあいだ』（前掲）に収録。

- (3) 奥村恒哉『歌枕』（平凡社、一九七七年）、片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』（笠間書院、一九九九年）。
- (4) 石田吉貞「中世紀行文学の問題点」、『季刊文学・語学』三七、一九六五年）。
- (5) 益田勝実「鄙に放たれた貴族」、『火山列島の思想』筑摩書房、一九六八年）。
- (6) 佐藤進一「増訂鎌倉幕府守護制度の研究」、『東京大学出版会、一九七二年）。
- (7) 細川涼一「阿仏尼伝の一節——律宗との関係をめぐって——」、『三浦古文化』四三、一九八八年）、のち『女の中世 小野小町・巴・その他』（日本エディタースクール出版部、一九八九年）に収録。
- (8) 五部大乘経については、拙稿「平安時代の写経と法会——五部大乘経をめぐって——」、『叢書 想像する平安文学 第8巻 音声と書くこと』（勉誠出版、二〇〇一年）参照。
- (9) 服藤早苗「遊行女婦から遊女へ」、『日本女性生活史』1原始・古代、東京大学出版会、一九九〇年）、のち『平安王朝社会のジェンダー——家・王権・性愛』（校倉書房、二〇〇五年）に収録。
- (10) 松岡心平「地方の文化と文学」、『岩波講座日本文学』第六巻、岩波書店、一九九六年）。
- (11) 川添昭二「宗祇の見た九州」、『中世文芸の地方史』平凡社、一九八二年）。
- (12) 今谷明『言継卿記 公家社会と町衆文化の接点』（そしえて、一九八〇年）。
- (13) 米原正義『戦国武士と文芸の研究』（桜楓社、一九七六年）。
- (14) 有光友學「今川領国における伝馬制」、『歴史公論』一一五、一九八五年）、のち『戦国大名今川氏の研究』（吉川弘文館、一九九四年）に収録。
- (15) 今谷明『言継卿記 公家社会と町衆文化の接点』（前掲）。
- (16) 藤井学「中世備前法華門徒の比企・池上・身延参詣について」、『日本宗教社会史論叢』国書刊行会、一九八二年）、のち『法華文化の展

開「法藏館、二〇〇二年」に収録。

- (17) 高橋良雄「廻国雑記の研究」(武蔵野書院、一九八七年)。
- (18) 今谷明「廻国雑記」成立の背景(「岩波講座日本文学史」第六卷月報13、岩波書店、一九九六年)。
- (19) ヘルベルト・プルチョウ「江戸の旅日記」『徳川啓蒙期』の博物学者たち(集英社新書、二〇〇五年)三〇頁。
- (20) 辻哲夫「貝原益軒の学問と方法——『大和本草』における儒学と科学——」(「思想」六〇五号、一九七四年)。
- (21) 辻本雅史「『学び』の復権——模倣と習熟」(角川書店、一九九九年)、のち岩波現代文庫、二〇一二年。
- (22) 木藤才蔵「中世の紀行と『おくのほそ道』」(「文学研究」二八、一九六八年)、のち『中世文学試論』(明治書院、一九八四年)に収録。
- (23) 島津忠夫「連歌師の文章」(「文学」三八—一、一九七〇年)、のち『連歌の研究』(角川書店、一九七三年)に収録。
- (24) 板坂耀子「江戸の紀行文——太平の世の旅人たち」(中公新書、二〇一一年)一五頁。
- (25) 板坂耀子「地方の文学」(「岩波講座日本文学史」一〇、岩波書店、一九九六年)。
- (26) 板坂耀子「蝦夷紀行概見」(「江戸時代文学誌」五、一九八七年)、のち『江戸の旅と文学』(ぺりかん社、一九九三年)に収録。
- (27) 菊池勇夫「幕藩体制内の『夷風』について——奥羽社会観を中心に——」(「幕藩体制と蝦夷地」雄山閣出版、一九八四年)。
- (28) 菊池勇夫「近世奥羽社会の『蝦夷』問題」(「北海道の研究」4・近世II、清文堂出版、一九八二年)、のち『生活文化のなかの『蝦夷』』と改題して「幕藩体制と蝦夷地」(雄山閣出版、一九八四年)に収録。
- (29) 佐々木潤之介「他からの目と内の芽と——古河古松軒・菅江真澄と長崎七左衛門・佐藤信淵——」(「北からの日本史」二、三省堂、一九九〇年)、のち「菅江真澄『ふみは千歳に残るものなり』——古松軒・真澄と七左衛門・信淵——」と改稿して『地域史を学ぶということ』(吉川弘文館、一九九六年)に収録。
- (30) 三戸幸久・渡邊邦夫『人とサル社会史』(東海大学出版会、一九九九年)。

- (31) 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』(塙書房、一九八二年)。
- (32) 板坂耀子「近世紀行文の『笑い』」(『熊本短大論集』五二、一九七五年)、のち「旅と笑い」と改題して『江戸の旅と文学』(前掲)に収録。
- (33) 成瀬不二雄「日本絵画における富士図の定型的表現について」(『美術史』一一二、一九八二年)、のち『富士山の絵画史』(中央公論美術出版、二〇〇五年)に改稿収録。
- (34) 鶴岡明美「江戸後期絵画の風景表現をめぐる諸問題」(『お茶の水女子大学人文科学紀要』四七、一九九四年)、のち『江戸期実景図の研究』(中央公論美術出版、二〇一二年)に改稿収録。